即席耳學問 上
通町
つたや

即席耳学問 中

即席耳学問 下

序

蓼くふ虫もすきゝ〳〵のみちは馬鹿々々しいと、二三年やめた所へ、蔦重が馮に例の教訓異見のうつとうしいも、隨分承知之助と板元の方から、しやれかけるをどつこいそこを虎の皮千里も走る大ぼやむきの趣向にせず、意地にかゝつてしやつきばり、いつもの癖の十割まし、たつた一つの心當、第一得意はお子様方へ、おぢいさん、おばあさん、お土産に持ちよいさし合禁物のない所を尻もちにして通笑自ら述ぶる。

爰に島屋仙右衛門とて
正直一遍に商ひを心掛け、
其身六十にあまる比は、人も知る
金持となりしを、ぐつすり
息子に讓り、名を學心と改め
樂な身となれば、あたりの子供を集め
忠孝の道と一生の心掛を
耳近く話しける。先づ父の恩は
富士山を眼の下に見る程高く、
母は恩詛宮の掘拔より深く、
主從の縁は四世の契り、
何と疎にはなるまいがと、
やは〳〵と敎ゆる其上、男は家を保ち、
女は夫を始め、舅姑のつかへやうまで、
まゝ譽をもつてこれを導きける故、
子供の行儀も目立つ程によくなれば、
後々には、子供より親爺おふくろが
我も〳〵と詰めかけ、

有難いを口の酸くなる程にいひて、
日々に聽く事が面白く、少しの
懈怠もならぬやうになりしも、
元來此隱居、商人といふ者なれば、
向うの心持を承知して
二十に賣るものは十九文、
四十のものは三十八文と
賣りかける心地の所へかゝつては、
釋迦でも孔子でも及ばぬ事、
卽座卽效の敎へ方、早業八人前の
學問の上を行つた手廻し、
早業千人前なり。
これをきゝて後、
道ある事を知りて學問を始めて
大極上々吉の人となりたる者、
その數を知らず、
隱居の悅び限りなければ、
又そのもとは
隱居の蔭と悅ぶ

「實語敎より面白くて覺えよい。又明日も聞きに來よう。」

又島屋の一軒おいて隣に、
徳田屋新右衛門といふ者あり、
これもそこらでの身上なれば、
何不足なく、其上六つになる
一人息子寵愛限りなし。
有る習ひ、我一人可愛がれば
近所で憎む事を
母親は氣の毒に思ひ
島屋の隱居樣の前も
面目もなしと、
段々亭主に意見すれど、
つんぼう程も聞かず
うつちやつておかつせえ、
子供は皆こんなもんだ、
何のあの隱居が
いふ事なれば、
聞いた事はねえが
忠孝の道ぢやとて、

それを知らぬ者があるものか、
御公儀様の掟を用ゐれば、
忠孝の道はいふに及ばず、
聞くにも及ばず、
こんな又知れた事も
ねえもんだ。
よもやあの隠居も
そんな事を珍しさうに
いひもせまい。
何ぞほかに面白い話でも
するであらうから、
それで聞きに行くであらう。
小僧も來年から
師匠様へ行くと
おとなしくなります。
ナア坊。

新右衛門型の如く律氣者にて、
尤も、商人なれば
大黒天を信じ、甲子怠りなく
御神酒供へに黒豆の御飯のみにて
九つまで我一人起きてゐて、
怠息災延命、猶成長の上
野呂間でござらぬやうに、
今の内は洟を垂らしても
後々は洟つたらしで
ござりませぬやうに、
偏にお願ひ申上げますと、
繰り返し繰り返し
お頼み申上げければ、
不思議なるかな
大黒天現はれ出で、
善哉々々、我は是などゝ、
しかつべらしき事なく、
とんとお心やすく、

「此お禮には
何でも
おねだり
なさりませ。」

新公さてお主が望は
世間の者とは事變り、
かの物を欲しいともいはず、
唯息子の事ばかり
かれこれ言やるが、
打出の小槌の方より
おれが料簡にはむづかしい。
然しながら
賴むとあれば
立引くてはないが、
殊にお主が事は、
持前の額の皺に皺をよせた
隱簑隱笠此二品を
お主に進上、ではない
暫く貸すから、
これを着てみやれと
お貸しなされけり。
大黑樣も
何といつても、お年寄だ
けて重さうなる御趣向なり。

「食物の事をいふは
勿體ないが、黑豆の飯は
强いと御免だ。
神酒德利も
よく振つて
くりやれ。」

授かりし簑と笠を
そつと二階へ上りて
着てみたところが、
隠れたか隠れぬか手前には知れねど、
窓から屋根を覗いてみれば、
近所の猫三匹
日向ぼこをして居れども、
見て居ても逃げも騒ぎもせず、
さてはこの姿、猫の眼にも
見えぬさうだ、これは面白いと
息を殺して覗ひければ
一匹の猫がいふ。
虎、手前は鼻の先をどうした
といへば、虎がいふ、
鰹を一切引いたら、おさんめが
途方もなく擦りあがつた、
かみ様が飯を入れてやれと
いはしつても、
面倒がつて入れてくれず、

ひだるいから引くのだ。
オヽ、おらが内でも昨日
此畜生奴は一日伏つて
けつかる。おいらも
今度は猫に生れたい。
好きな鼠を食つて一日寝て居る、
こんな樂なものはないといふから
大笑ひぢやアねえか。
おれはもう鼠は嫌ひだが、
あいつがうせて飯つぎを
嚙つてやられては濟まねえ。
内の者が寝るとおらあまんじりともしねえ。
晝睡くなくつてどうするもんだ。
鼠も山椒醤油の附焼か、又食卓のやうにでもしたら
食へもしようが、
その儘食つて喰はれるものか。
さりとは人間といふ者はものを知らぬもんだ
と話せば、新右衛門は初めてかやうな事を聞き、
呆れ果て、膽をくる〳〵
でんぐりかへす。

「おらが
かみさんは
こいつは
化けもしよう
といふが、手前の振袖を
着た事は棚へ上げて。」

猫の話に我折り果て、
又犬の心意氣を聞かんと覗へば、
これも同じく夜番の話、
昨夜胡亂な奴が見えたから
まんじりともしねえ、横町の方でも
時々飯の一杯づゝも食はせるから
此處も行き廻つて見たり
看屋は一得意だから粗末にはならず、
烏の鳴くまで聲を枯らした故、
草臥れて通り中に他愛なく寢て居たら、
何處のべら坊か、したゝか踏みやがつた。
おれが考へてみるに、咎もねえ者を
責めるといふ痴もあればあるものだ。
此處での事だが、おいらは
世間の狹い者だから、旦那衆の氣に
背いてはならねえ。子供衆が手を
くれろといはつしやると幾度でも
進ぜる。兎角可愛がられるが得だ
と話せば、新右衛門聞きて
おそろ感心々々。

「早く伯母様でも降ればいゝ。」

犬の口からかういへば、雪は犬の伯母なることと明けし。

「伊勢屋の御用も坊主はいゝ奴だが、一人のに困る。」

新右衛門はかの簑笠の
威德を知りて、少し料簡ありて、
江の島鎌倉大山の邊、
箱根邊りへぶらつかんと、
たゞ一人にて出かけ、
此簑笠さへ着ると
箱根も手形入らねど、
其處が大黒樣なか〳〵天下のお關所、
こゝでは隱れといふ字はお嫌ひ、
その他品川で洒落ても
笠をかぶり三軒屋でおごり、
濱川で生きた鰈をしてやり、
神奈川泊り藤澤泊りも
簑さへ着ようものなら、
うまいものゝ親玉なれど、
こゝが新右衛門、
大黒の氣に入る正直者、
それでなければ大事の物を
お貸しなされぬ筈、
神は其處が見通して大の御承知さ。

それより御殿山の方へ行く程に、
鳥の一群ちやちやくちやと鳴き行く故、
こいつも面白さうな事と、
かの簑笠引かけ後を慕ひければ
森々たる森の打續いて、
覗へば一つの庵ありて
向うの方より來るものを見れば
鳩なりけり。大小仕祢にて
こなたの鳩は袴羽織、
はたと行き逢ひしが、
その禮儀正しく慇懃なること
人も恥づべきなり。
實、鳩に三枝の禮あると。
親より三枝下りて止る由、
他人すらかやうなれば
親にはさあるべしと、
又鳥類にも恥入りける。
なたかの庵をさし覗けば、
老人の鳥に息子らしき鳥が

給仕して食をすゝめける。
何ぞ御氣に入りましたら、
お替下されませ(と)いへば、
いや〳〵皆々うまき故
十分なりといふ。
これらをや烏に反哺の孝とや
いふべくと思へば、
百日親の養ひを受け、
百日親を養ふといふ
それでは元値商ひ
損得なしの孝行ぢやと思つたが、
なか〳〵老人への扱ひ、
百年の孝ありとも見ゆる。
いやはや、人間として
鳥類にも大凹みだ、
息子の烏
今日は御番でございます
といふ故、
後を慕はんと思ふ。

烏の後につき來りて見れば、
鳥類のお役所と見えて、
さまゝ〳〵の願ひ手あり、
鶏の喧嘩出入雙方お叱り、
稻穗に雀、粟に鶏、
いづれも零れたるより外
一向取るまじき由
仰せつけられける。
先立つて雁鴨にも
申しつけたる通り、
百姓の骨を折りたるものを
只食ふては相濟まぬ。
零れたる分は
大切の雜穀すたる故、
この分は勝手に食すべし。
また啄木鳥は枯木の外は
一切禁制、櫻に遊ぶ鶯に
御不審のお尋ありと評定の中へ
鳶の繩付を引き据ゑ、

御吟味の條は、
その方前々より嚴しく
申しつけしにいかゞ相心得、
豆腐油揚を盗み居る。
それを食はねばならぬ
といふこともあるまい。
畢竟おのれが奢りの沙汰、
その他肴賣の魚を
浚ふつもりであらうが、
四文錢一本浚うたる咎、
油揚と思つて煙草入を
浚ふのみならず、
小僧が手を引搔きし咎、
又三百が蒲燒をしよしめたる事迄
一々露見しけるが、
大膽不敵一々舊惡御吟味の上、
蜜柑籠に入れられ
非人に下され、
家々の前に晒さるゝに極る。

新右衛門は
鳥類の様子
あらまし聞き、
まだ面白さうな事も
あるべけれども、
先を急ぎて
大山の方へ志し、
不動へ參詣し、
それより
小田原の方へ
かけ越しのつもりにて
山道にかゝり、
足にまかせて
無性にのめくり、
やたらに歩きけるが、
行けば行くほど
茶を一杯のむことも、
團子を一本食ふ所もなし。
さてはこれは

途方もなく道に
踏み迷つたと見えたが
簑笠のお蔭には
災難はない筈、
されど腹のきたのは
差當つての災難、
柚にでも
獵人にても、
少々は泥坊にでも
逢つて
道をきゝたいと
獨り言を
いひ〳〵
行く。」

さてまだ
行く程に〳〵
大きなる岩を越え、
谷を飛びても
道らしき所はなく、
一つの岩窟あり、
凄じく熊笹がある故、
覗いてみれば
大きな倉作りのやうなる
洞穴なり。
奥の方に二つ
びかり〳〵と光るを
よく〳〵見れば、
大熊の眼玉を怒らし
煙草をのんで居る故
びつくりし、此所は
さしづめ簑笠を
着る所なれど、
道が知れねばつまらぬ故
怖々ながら、

「これは珍物でございます。」

「わしが所は

ちとお頼み申します、
私は道に踏迷ひたる者で
ございます。小田原の方へは
どう參じますと、
無性に慇懃にいへば、
それはつがもねえ間違ひだ。
今日は貴公は二十里ばかり
山を歩いた。どうで今日は
歸られねえ、
まあこちらへ這入らせえ。
さぞ(腹)も減つたであらうが、
飯などはない事なれば
これを嘗め給へと手を出しけるは、
かの蟻を塗りつけたるなり。
これは冬中の蓄へなれど
進ぜるといふを嘗めてみた所が、
なか〳〵二つ膳つきのお振舞より
うまい事どうもいへぬ腹鹽梅なり。
世の人いふ通り蟻は熊(の)食物と
聞きしに嘗めるは今が初めなり。

他に馳走
もならず、
そして
面白くもない所
なれば、明日は道まで
送らせて
やりませう」

親類より深切に世話をするは奇特な事なり。

と田舍の

猿と兎は
熊の使ひに
狼を呼びにゆく。

なんぼ深切にしてくれても、其夜はまんじりともせず、はや夜も明けゝれば狼にいひつけ道の知れる所まで送らせける。

新右衛門も送り狼とは聞傳へて承知なれば後生大事に足元に氣をつけ道々話しながら歩きければ、顔つきとは違ひにて、

私共は兎角人間程怖いものはございませぬ、人が怖いから威してみたり、張込んでみたり、先からさへ構はねばこっちからどうしてさと話せば、いかさまお前達の氣象ではさうであらう、昨夜からのみんなのお世話は大抵なこっちやあねえと、空輕薄をいひながら、狼は近道を知ってゐる故、昨日の二十里を半日かゝらず本街道まで出でけり。

「熊が道に迷つて來ても、一晩でも泊める人間は日本國にはあるまい。おれもその仲間だ。氣恥しい。」

新右は獸世界の厄介になりても、禮に行く悔れもなく江の島も詣り、七里ケ濱にかゝりしに、大蛤を見てつく〳〵思ひけるは、花に鳴く鶯、水に棲む蛙も歌を詠むは日本だと、住吉明神白樂天を張込み、又勸學院の雀は蒙求を囀つたといふ。雀も四角な文字をひねくりしその上りに、海中に入つて蛤となりしが、さりながら桝ではかる奴等まで雀であらうものなら、人の食ふ稻穗はない筈、此大蛤は元が學者故、蜃氣樓といふ唐の屋作りを吹いて樂しみけるを、新右も面白き故、ふわりとその蛤に乘りければ、だん〳〵と底へ沈みける。新右思ふは、簑笠の德あれば水も濡らすまじ、さらばよきついでなれば、龍宮を見て來んとの出來心、ぐつと目口をふさいで蛤任せに行きにける。さりとは大黑樣はおつりきなものをお貸しなされたと心で樂しむも可笑し。

「慾心には、この蜃氣樓を蠣殼町の河岸で見せたい。」

新右衛門暫く過ぎて目を開けば、
ちよつくり龍宮に着きけるが、
此處も簑笠にて隠れ見るに、
大昔の通りなるは龍宮ばかりなり。
まづ此處にては八大龍王に齒の立つものはなし、
鳥獸の世界は人と交り棲む故、時々の變り目あり、
また海中廣しといへど
潮のさす限りを龍王の支配なり。
それ故鮃が鯛の上にも立たず、
鰡や鰐は、名を改める度に
お目見得する事なり。
さて世上に鰒が人の命を取るといふ事を聞き
龍王これを改めんと近く召され、
此事を問ひ給ひければ、
鰒申すやう、其儀われ〳〵の
なす所にあらず、てふといへる
虫のつきて人を失へる事にて候と、
明白に申譯立ちけれども、龍宮へ
惡名つけし事の恥かしさと、

「せいこの古より鰒の只今に經上りしは、家の面目有難うこざります。」

我家へ歸ると其儘腹を掻切つて
死しけり。それ故か今も
鰒に限りて腸なし。
この位堅い所なれば
王法の正しき事なりける。
新右衞門忍び居て思ふやう、
淡海公の時分、此簑笠で
玉取りに頼まれたら、
うまい仕事だ。然し
盗む事には
利くまいかは知らず。

「鰡鯔の類はもと
川より勤めるもの故、
成長に從ひ、官名を
下され、又龍宮に
棲むものは鯛より
鯉まで親の名を繼ぐは
よくきめた世界なり。

新右衛門、龍宮もあらまし見けるが、
食はねまでも
精進日には目の毒と
歸るつもりに出立つて
とある格子作りの家を
覗いてみれば醫者の由、
大勢療治に來る。
病は十人が九人は
口中を痛めたるが多く見えける。
これは皆釣られはぐりし輩なり。
昔、彦火々出見尊
あかめといふ魚に
鈎をとられ給ひしを、
此所に尋ね來り、
取り返して歸られたる事を
今は早や知る者なきと見えたり。
それが知れて居れば
一匹も釣れる筈はなし。
とかく、刺のある食物に

鯉と芝蝦は氣を付けて上つれ。然し私が親芋は故人になりました。

あてられしとばかり思ふも理なり。
また鰐に突かれたる鯨は
膏藥を貼る事繪の如し。
さて小魚の怪俄は、
淺草川の邊(て)養生しける。
さすれば川水は
龍宮の湯治場なるか。
鯨などは湯治とは
事むづかしければ
膏藥で直すも
理なり。

「膏藥か腰張か
知れぬ。
いつそ鏝で
塗るのが
よさゝうな
理窟だ。」

思ひの外に遊び過ごし、大黒様も内の者も
案じるであらうと心附き、馬にて急ぎしに、
權田坂へかゝれば、仲間の馬子が一服してゐる故、
またそこへ繋ぎて馬子は煙草にしかけると、
さきに休み居る馬、新右が乘りし馬に、お早いのと
挨拶するに、新右もびつくりして眠りを覺せば、
馬同士の附合ひ、さて昨日は途方もなく草臥れた。
宿から川端までげんことといふ仕事をして
また戻りを臺まて酒代ぐるみやみはんとつて、
またちばて宿まで乘せて、それから
のたまくめが内まで乘つて歸りをるに
がつかり弱り切つたといへば、
新右が馬、そいつはよかつたの、
おいらは角の酒屋の前にあぶれて、
子供等には太鼓を打ての何のと遊ばれ
おらが生酔もお觸が嚴しいから、
かの事もならず、のつっそつつして
やう〳〵拜むやうにして、
たつたばんどう取つて歸ると

「お主が旦那は眠るさうだ。ひんといつて起せ。」

親方は二疋でこれは何の態だと
機嫌が悪いも尤も、一本づゝも取らねば
勘定に合ふもんぢやあねえ、
一本にもなればまづよしと思へば
そのうちをくらう、
氣が痛んでなるもんぢやあねえ。
いつそ植附時分には
骨を折るけれど何とも思はぬが、
駄賃をとりに出ると氣が痛む。
先づ乘つた人を落すまいと
氣をつけるをば知らずに、心持がいゝから
こく〳〵眠りしてはのめくり落ちて、
盲目馬の跛奴のといはれ、
こんな又割の弱い事もねえもんだ。
今度の世には殿様の馬に生れて、
うまい物を食つて猿の踊でも見て
樂しみたいと話せば、新右衛門は
耳をすまして聞けども他の者にはひん〳〵
とばかり聞える。これも簑笠の德なるべし。

「親方安くやらう。」

新右衛門すた〳〵家に歸れば、家内の喜び大方ならず、扨湯に入り飯を食ひ仕舞ふと、大黒天少しお待兼と見えて、のさ〳〵座敷へ現れ出給ひ、さて新右衛門、お主は今度は味な心得になることを見聞しやつたが、何でも同じ理窟だ、話して聞かせよう。遠慮なしに家内の者にも聞かせろさ。

「扨ちと高慢くさいが、それ、人は天が下の御霊物とあれば、天地の霊物ぢや。よつて生を保つものゝ惣御頭だが、惡くすると そいつに鳥獸より遙に劣つた奴がある。神仲間でも不愍には思へども、おのれが心の置所が違うた故、護るべき道理なし。その中にお主などはよく天下の掟を守り家を大切にして先祖の孝を立てるはよい事に違ひなき故、我々もかく心安くするぢや、よく考へて見やれ、鳥獸に横着者はなし、いづれも正直我が生を愛するのみなれば、口に食ふ事にばかり馳け巡りける。これ彼等が道といふもの、人はやゝもすれば

「重ねゝ有難う存じます。どうともは又有難うございます。」

おれは正直でござるといふ。
正直といふは人の持前、何の味噌を
上げる事があるものだ。不正直とくらべ物に
するから道を取りちがへる。お主は
あまり物を讀まぬさうだが、正直一遍で
すんだからいゝが、鳥獸も今いふ通り正直、
それでは人間の詮がない。兎角、息子には讀ませて
人の道ある事を敎へやれ。よくいふ事だが、
本を讀むと高慢だの仔細らしいのといふが、
そのやうなものは口元ばかりの學問、然しながら
物を讀んでその先ばかり穿鑿するはせぬに劣る。
とかくに身の行ひをよくするが一冊でも、
讀んだ詮といふもんだ。人には上下の差別
はありといへど心に上下はなし。
下々の者乍らもよく道を守るを
人の人といふもの、身の行ひ惡い奴は、
わん〳〵にやあ〳〵といふと同じ事だ。
これはまあ大概の話、兎角學ばねば知れぬ事
だ。おれは遂にこんな事をいうた事はないが、
お主が悴をよくせんとおれを賴みやる志、親
たる者の道にかなふ故、據なく口不調法ながら
長言をいうたが、必ず〳〵世間へは沙汰なし〳〵。

「兎角讀ませやれ、讀むに越えた寶はおれも持たぬ。錢金は湧物、ちつと湧きかねるが、まづ湧物よ。もし湧かずばその時はどうともしようわさ。」

大黒天の仰に任せ、息子七歳より孝經大學を讀ませ、
手前も側にて招伴の學問、今までは我ばかり
よかれと思ひしを、我より人をよかれ
と思ふ。今まで金銀でなければ世は
渡られぬものと思ひ、兎角錢を儲けて
儲けてと、うぬが竈の下の用心ばかり
して居るを得のやうに思うたが、それは一旦の
利潤にて遂には亡ぶるぞと大神宮樣もお誡め
なされ又聖人も他からさがつて入る時はさがつて
出ると教へ置かれた。何と結構な事か。
新右衞門は息子の餘學問なれば、唐詩選
とやらを書いた扇などは讀む事も
ならねど、手前の身を修むる事は
呑込み、其上犬猫鳶烏の心意氣
まで承知しければ、島屋の隱居の
跡繼と世間でも用ゐられける程に、
息子は學問する上にそれを見習ひ、
上々の人となりさうなれば夫婦の喜び、
これも大黒樣のお蔭と
いつ〳〵よりも又目出度く春を迎へけり。